

龍谷顕真会会報

編集・発行 龍谷顕真会事務局 京都市下京区堀川花屋町下ル 浄土真宗本願寺派 総局公室(広報)内

もくじ

フォトグラフ	2
15年の歩み	3
記念講演「ふるさとをどうするか」 朝日新聞論説委員 水江信雄	4~8

平成元年度活動報告	9~11
世話人紹介	12
総会報告	12



結成15周年を祝う

本会の結成十五周年を祝う記念パーティーと年度総会を五月の二十五、六の二日間、十七人の会員が出席して開催した。

本山近くのホテルでの記念パーティーには、渡邊静波総長、藤澤實晟総務も出席、祝辞のあいさつに立った渡邊総長は「十五年を一つの節目として、新たなスタートを切って下さい。みなさんのご活躍を期待しています」と激励。続いて川越証真代表世話人が「宗門の皆様のご支援のもと、十五周年を迎えることができました。今後も宗祖のお心を体して地方自治体の振興に取り組みます」と全会員の決意を披れきした。パーティーには先頃入会した三人の新会員も出席、会場には歓談の輪が幾重にもひろがっていた。さらに、翌日の総会では役員改選を行い、川越代表世話人を再選、有意義な二日間となった。

記念フォトグラフ



◀ 祝辞を述べる渡邊総長



パーティーも和やかに



▲ 川越代表世話人の挨拶

▼ 開会式で挨拶をする藤澤総務



▲ 大会議室での開会式



▲ 総会の模様ら



▲ 中村幸教石川県議による万歳三唱

龍谷頭真会15年のあゆみ

○発会式（昭和49年4月25日）

△参加者数▽49人 △内容▽前門さまより「龍谷頭真会」とご命名頂く。規約等を決定。

○第二回（昭和50年7月29日）

△参加者数▽37人

○第三回（昭和51年4月27・28日）

△参加者数▽28人 △基調講演▽「宗門がどのように政治にかかわるべきか」（福井県丸岡町長・朝日岳乗） 「龍谷頭真会」と門徒の地方自治体議員・首長との提携」（北海道木古内町議・多田勝）

○第四回（昭和52年5月13・14日）

△参加者数▽不明 △基調講演▽「教団史における政治とのかかわり」（龍谷大学名誉教授・宮崎円遵）

○第五回（昭和53年5月9・10日）

△参加者数▽23人 △記念講演▽「豊かな日本の政治的課題」（京都大学教授・高坂正堯）

○第六回（昭和54年5月30・31日）

△参加者数▽28人 △記念講演▽「宗教と政治」（龍谷大学教授・佐藤三千雄）

○第七回（昭和55年6月5・6日）

○第八回（昭和56年6月5・6日）

△参加者数▽30人 △記念講演▽「現代の社会問題について」（京都府知事・林田悠紀夫）

○第九回（昭和57年5月26日）

△参加者数▽29人 △記念講演▽「エネルギー行政と自治体」（敦賀市長・高木孝二）

○第十回（昭和58年5月27日）

△参加者数▽25人 △記念講演▽「宗教と政治」（京都大学教授・矢野暢）

○第十一回（昭和59年5月25日）

△参加者数▽31人 △記念講演▽「宗教と政治」（参議院議員・杉山令肇）

○第十二回（昭和60年5月31日）

△参加者数▽31人 体験発表のみ

○第十三回（昭和61年5月30日）

△参加者数▽31人 △記念講演▽「国際化時代における宗教について考える」（龍谷大学教授・口羽益生）

○第十四回（昭和62年5月27日）

△参加者数▽25人 △記念講演▽「変革期の政治と経済」（京都大学教授・高坂正堯）

○第十五回（昭和63年5月27日）

△参加者数▽15人 △記念講演▽「宗門の

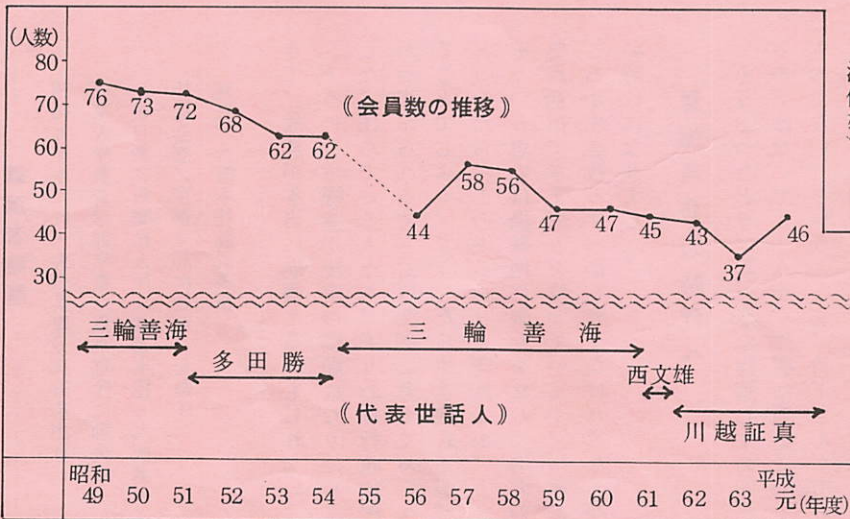
△参加者数▽24人

△記念講演▽「宗教と政治」（毎日新聞編集委員・内藤国夫）

現況と展望」（本願寺派総合企画室長・白鳥幸雄）

○第十六回（平成元年5月26日）

△参加者数▽18人 △記念講演▽「ふるさとをどうするか」（朝日新聞論説委員・水江信雄）



記念講演

ふるさとをどうするか

朝日新聞論説委員 水江 信雄

苦悩する過疎の町

私の郷里は大分県の豊後高田市という田舎町です。つい先日、父の三十三回忌で帰りました。寺は真宗大谷派で、門徒は三百戸ほどです。坊守が幼なじみで法要のあと訪ねましたが、座敷からの眺めは子供の頃と同じでした。ふるさとに昔変わらぬものがあるというのはいいですねえ。

郷里もそうだし、全国どこを歩いても、ずいぶん変わったなあと感じます。田舎に行ってもまず目につくのは道路がよくなったことで



です。ひところ、どこへ行っても草茫々で荒れはてた印象がありましたが、近ごろはきれいです。この春は至るところでウグイスの声を聞き、小鳥がふえたような気がしました。

帰省して大分県内を少し歩いたんですが、麦畑が増えましたねえ。郷里の隣接市・宇佐は、焼酎ブームの火つけ役「いいちこ」の産地です。焼酎や味噌づくりが盛んになったからでしょうか。荒れた休耕田と違い、麦畑は心が和む。

しかし、故郷を離れた者が評論家になっても仕方がない。そこに暮らす人々のことを思わねばなりません。それを思うとき、重い気持ちになります。

郷里の町にまるで活気がないんです。そう感じさせるものは何か。第一に子供の声を聞かないこと。町に人通りがないこと。町が老いてきたという実感がある。

いま、過疎の町を老親たちが支えています。でも時間に限りがある。あとを誰が支えるのか。いずれ農産物自由化という高波も襲って

講演者略歴

昭和九年生まれ・大分県豊後高田市出身。
東京大学教育学部卒業、東京都庁に勤務した後、朝日新聞社入社（東京本社・大阪本社社会部／京都支局次長などを歴任）
現在、大阪本社論説委員。

きて、故郷が本当に崩壊するかもしれない。そういう危機感が現実の問題になり始めました。住んでいる人たちが、とりわけ行政に携わっておられる皆さんは深剣に考えておられることでしょうか。どうしたら生き残れるか。どうしたら、このふるさとを守れるか。……そういう思いは過疎地に限りません。地方の拠点都市でさえ悩みを持っています。発展どころか生き残るすべから考えなければならぬ時代になりました。

意識革命の時代へ

そうなったとき、みなさん痛感しておられるのではないのでしょうか。知恵は咄嗟に出るものでない、ということ。竹下さんが市町村に一律一億円をバラまきましたね。「ヒモつきでない自由に使える金が一億円あったらなあ」と思ったことのある首長は多いはずで、す。しかし一億円を目の前に積まれてみると、どう使ったらいいいものやら名案が浮かばない。全国の市町村が戸惑っている。

知恵は、火事場の馬鹿力みたいに土壇場になつたら出るというものではありません。それなのに、地方はいま知恵を出さざるを得ない状況に追い込まれている。

そういう中で、きょう私がお話ししたいのは、どうしたら知恵が出せるかといった現世ご利便的なことではありません。もっと基本的なこと、「知恵が出せるようになるにはどんなことが大切か」です。しかも私は専門家ではありません。ささやかな体験の中で考えたことをお話しできるようにしません。

さて、ご承知のように大分県で一村一品運動が始まって十年になります。この運動は、「むらおこし」の原点といわれますが、言葉を変えれば「知恵を出そう」運動の原点です。なぜ原点なのか。そこを理解するために時代の流れを振り返ってみましょう。

昭和三十年代に経済の高度成長が始まりました。そのとき地方で何が起きたか。労働力の流出です。田舎の人たちが経済成長を担う戦士として都市に集中しました。その裏返しとして山陰を先頭に過疎が始まりました。九州なんかは集団就職の一大供給地でした。「金の卵」と呼ばれる若い人たちがどっと都会へ向かったのです。その結果何が起きたか。

都会と地方の格差が広がりました。経済成長は都市をふくらませ、地方はいわば「原料輸出国」として痩せ細った。国土の発展はバ

ランスのとれたものでなければなりません。地域格差の拡大は望ましいことではない。是正すべきです。

そこで打ち出されたのが、昭和三十年代後半に始まる全国総合開発計画です。二十年、三十年の長期展望に立つ国土開発計画です。その最大の課題は地域格差の解消、具体的に言うところ地方への産業分散でした。

全総はこれまでに三回改定されています。時代環境が変わったから手直しがあったというよりも、「均衡のとれた国土開発」がどうしてもできなかった、つまり産業の地方分散政策がうまくいかなかったことの証明だと思つたほうがいい。

重工業、いわゆる「重厚長大」を中心とした高度経済成長の時代は、昭和四十八年の石油ショックで幕を閉じました。その辺りから、世の中の考え方に変化が出てきました。

年配の方は知っていますが、戦後にまずやつたことといえば学校の校舎建設でした。ついで道路や施設づくりでした。地域の基盤整備、いわゆるモノづくり、ハコづくりです。それは四十年代で曲がりなりにも終えたといえます。その辺りから世間の考え方が変わってきたということです。

地方自治において、そういう変化がはつきり出てきたのは五十年代に入ってからです。十年ほど前、盛んに「地方の時代」と言われ

たのを覚えておられるでしょう。道路とか施設づくりが一通り終わると、次は何をするか。道路や施設づくりのように全国一律の発想では間尺に合わない。独自の発想、行き方が必要になる。個性化の時代です。もはや国の後ろにくつついて行けばいい時代ではない。地方が主導権を握って地域のことを考えていくしかない。「地方の時代」という呼び掛けはそういうことだつたと思います。

過疎県の大部分では、まさにそういう時代環境の中で一村一品運動が始まりました。その背景を申しますと、先に触れました全国総合開発計画、その流れのなかでできた大分市周辺の臨海コンビナートに遠因があります。後背地は、若い労働力が流出して過疎が深刻になりました。強い危機感が生まれました。このままでは地域がダメになる。何とかせねばならない。でも、どうしたらいいか分からないう。そんな中で平松知事が「自分たちで再生を考えていこう」と提唱したのです。

このことから分かるように、一村一品運動の本質は、お上への依存体質から「結局、自分たちでやるしかない」へと頭を切り替えさせる意識革命でした。単なる殖産興業、あるいはアイデアで金儲けをしようという運動ではありません。

大分県に限りません。全国に波及した「むらおこし」は、危機感をバネにした意識革命、

精神革命という意味合いを持っています。

では、なぜそういう意識革命が必要になってきたのでしょうか。私は、地方の人々が「これまでのような考え方はダメなんだ」ということに気づかなければならない時代、情勢になってきたからだと思います。

永続・安定性を重視

毎年、国家予算の編成時に自治体のおエライさんがどつと東京へ行きます。金を地方によこしてもらうためです。「産業をぜひわが県へ」と中央へ誘致に出かける。予算獲得運動は仕方ないとしても、産業誘致はどうでしょう。ほとんど望みはありません。もはや巨大産業や先端産業が地方にやってくるような状況にはない。説明は省略しますが、情報化時代の産業は大都市圏、それも東京圏に集中せざるを得ない事情があります。

それに、巨大産業がどんなものか、もうお分かりのはずです。重厚長大の時代が過ぎて瀬戸内の工業地帯はどうなったでしょうか。企業城下町は灯が消えたように活気を失いました。後に残されたのは自然破壊、環境破壊の傷跡です。

そもそも他所から何か誘致してきて地域の活性化を図ろうというのはムシが良すぎる。成功はおぼつかない。地方には、それぞれかけがえのない自然、歴史、文化がある。個性

があります。その個性を生かした地域再生の道を自分たちで探らなくてはなりません。それを「内的発展」と呼ぶ学者もいます。ひとのふんどしで相撲をとるな、です。他所の人は「利用」が先行します。地域の個性をよく理解し、尊重してくれる訳がありません。

以上、長い前置きになりましたが、こうした時代状況をふまえた上で、具体的なレベルで「むらおこし」の知恵の基本的なありようを考えてみたいと思います。

近ごろイベントが盛んですね。力のある地域、すなわち地方の中核都市は博覧会を開く。小さな村は、分相応に地域の特性を生かした催しを考える。基本にあるのは、人呼び込むことが地域活性化の刺激剤になるという考え方です。それは正しいと思う。人との交流は大きな刺激剤になります。

一方で古い手法も目につきます。産業誘致がうまくいかないとゴルフ場、リゾート施設なんかを呼び込もうとする。これならなにがしか税収も増える。雇用も生まれる。あるいはすごい音楽ホールを建てるなど話題づくりをする。

みんな真剣に知恵をしぼった結果で、頭ごなしにダメだとは言えません。しかし、発想の基本において大切な視点が欠けているように思えます。

それは「永続、安定性」です。イベントは

一過性に終わる可能性が強い。

ゴルフ場、リゾート開発なんかは、貴重な自然を破壊する。ゴルフ場が六つもできた奈良県の山奥の村を先日見て来ました。そこで何が起きているか。これまで澄んだ沢の水を引いていた田んぼに赤い水が流れ込んでいます。ゴルフ場からしみ出た水です。それを分析したら、農業には禁止されている危険農薬が含まれていました。その下流に村の簡易水道がある。いま第三次ゴルフブームだそうです、そろそろ過当競争になりつつある。つぶれるかもしれない。

田舎町がデラックスな音楽ホールなんかつく。こうしたモノ造りには、えてして維持運営が大変だという側面がぬけている。

無理のない、永続性のある活性化が大切です。先ほど申しました「基本的なありよう」の一つは、そういうことです。そのために必要なのは「見えない価値を大切にすること」と思います。

見えない価値とは何か。大雑把に言えば文化です。文化とは、その地域社会がはぐくんできたものすべてを指しますが、そういうものを私たちはいとも簡単に捨てる傾向がある。金になる、便利になる、という「見えない価値」を平気で犠牲にする。

自然破壊、景観破壊がそうです。歴史、伝統文化を何とも思わない。戦後日本の経済発

展は、裏から見ると、物質文明にどっぷりつかって伝統文化を放棄する過程であったと言えましょう。……山形県出身の作家、藤沢周平がこう嘆いています。

「故郷に帰るたびに怪訝に思うことがある。快適な暮らしを手に入れるために、我々はどこまで犠牲を払わねばならないのか」実は、見えない価値、文化こそ「知恵」の源泉であることに気づかねばならないと思います。

「学ぶ」姿勢が大切

さて、ここで話の流れを少し変えましょう。これまでの話は、要するに発想の転換が必要だと申し上げたかったのです。とすれば、次は「どうやったら発想の転換ができるのか」ということになります。その方法について二点に触れたい。

一つは「大所高所から考えるのではなく、身近なところから考える」ということです。例えば、近ごろ雪国のキャッチフレーズが、「克雪」から「利雪」に変わりました。雪国の人々にとって雪の不便さは耐えるしかないものでした。だが、五十六年豪雪を境に除、排雪対策が進みました。すると、人々の意識が「雪と闘う」「雪を克服する」から「雪を利用しよう」に変わってきました。いま、野菜の長期貯蔵、都市冷暖房、生物発酵による道路融雪など実に多彩な試みが始まっていま

す。雪は「迷惑なもの」という発想を「北国の資源」に変えたんです。そして、日々の暮らしに生かせないものかと身近なところで考え始めたんです。富山県なんか小学生からもアイデアを集めています。そのアイデアがまた奇想天外で愉快です。

ここで申し上げたいのは、身近な個別の問題に取り組み、そこから全体を見る、問題の本質を見透かすという手法が大切だということです。役所の発想はだいたい逆で、「社会情勢がこうだから」「よそにならって」やるというのが多い。没個性です。それではユニークな発想は生まれません。

二つ目は、身近な問題を考えるときに大切なのは情報だということです。広く知識を求めなければならぬ。各地との交流、情報交換が大切です。机に座っているだけでは知恵は浮かばない。

さらに一歩進んで申しますと、情報・知識を集めただけでエラくはならない、知恵は出ないということです。ふだん考える訓練をしておかないとダメだということです。先に述べました「知恵は火事場の馬鹿力みたいに土壇場で出るものではない」ということの意味はそういうことです。現実を考えても、お分かりでしょう。知恵というものはいつぱい出したらそれでOKというものではない。状況変化への対応策が絶えず要求される。改善が

求められる。そういう努力の持続で利口になっていく。

ふだんからいろんな問題意識を持っておく、そのためにあらゆる機会をとらえて考える。つまり「学ぶ」という姿勢が大切なんです。

文化による活性化

そういったことに絡んで「地方」という言葉について考えてみましょう。

地方の反対は中央。日本が近代的な中央集権の体制になってから、抜き難い中央指向があります。中央はエライ。地方は遅れている。いわゆる標準語に対する劣等感のようなものがある。全国に「○○銀座」がある。伊奈かつ平や吉幾三のような地方の芸人は、東京に出て売れなきや故郷で一流として扱われない。これはおかしい。東京的発想です。欧米の日本タキも同じです。自分の物差しで人を判断する。欧米人には、自分の価値観が日本でも通用すると錯覚しているところがある。文化というのは、大雑把にいうと価値体系、文化の違いというのは価値観の違いです。ものの考え方、見方は土地によって違う。それぞれ人々が長い時間をかけて育ててきた文化が背景にあるからです。違うからこそ存在価値がある。そして、知恵を出せるかどうかは、それぞれの文化が潜在的にもっている力、文化力によります。文化こそ地方活性化の天然

資源だということを是非理解してほしい。

抽象的な話では分かりにくいから、文化力について一つ実例を申し上げましょう。

実は先日、ゴールデンウィークに山陰地方を旅行し、島根県の津和野に寄りました。かつては小さな盆地の小藩でした。そこから近代日本をつくった二人の人物が輩出しました。森鷗外の生家がある。小さな川の向こう五十メートルほどのところに、蘭学者で哲学者の西周の生家がある。一方では、明治の新政府にあって、仏教なんかやめてしまえと廢仏毀釈をやった総大将も出ている。

長州藩からみると盲腸でいど、わずか五万石の小藩からなぜこうした人材が生まれたのか。実は小藩だから殖産興業の資金もなかった。金がなくてもできるのが学問です。学問を志した。郷土館をのぞくと英、仏、露、オランダ語の本なんかが残っていてびっくりします。江戸のころ小藩はそんな文化指向の道を選んだんですね。そこに人材が育った。蘭学などの中心は江戸ではなく地方の小藩だったんです。

津和野はいま観光客でにぎわっていますが、私は観光で活性化しただけとは思わない。観光客はそう思わないかもしれないが、津和野にはちゃんとした文化があったんです。それが人びとをひきつけるのだと思います。明治維新は、近代改革それ自体の成功よりも、

平和な江戸時代にこうして各藩が蓄積した文化があったから実現したということに意味があると私は思います。

村おこしを考える

そういう視点から、もう一度「むらおこし」を考えてみたいと思います。

地方にはいままも産業誘致熱があります。なるほど成功すればカンフル注射みたいに手っ取り早い即効があるかもしれない。しかし、それに伴う自然破壊、美しい郷土の喪失、万事お金の風潮がもたらす心の破壊、つまりは伝統的な地域文化の消失を眺めていると、むしろその先にこそふるさとの崩壊が見えてきます。「こころ」こそ大切なのです。柳田国男はこう書いています。

「美しい村が始めからあるはずがなく、そこに住む人が美しく住もうと思えばこそ村は美しくなっていく」

これには「背に腹は替えられない」という反論があるかもしれませんが。田舎には働き口がないから若い者が都会に出ていく。もはや年寄りばかりになった田舎にはそんな悠長な説教なんか尻のつっぱりにもならない、と。

その気持ちは分かる。でも、私たちはなぜこうもせっかちなんでしょうか。「むらおこし」はきょう、あすの問題ではありません。たしかに、ふるさとが崩壊しようかというとき暢

気なことは言っておれないかも知れないが、「壊れたらまた造ればいい」くらいの懐の深さが必要です。こんな話があります。

先年なくなった漫画家のおおば比呂司さんは晩年に四年ほどオランダのアムステルダムに移り住んでいました。わが社の先輩記者が定年後のバック旅行でアムステルダムに行ったとき、知己のおおば邸を訪ねました。高級住宅街の三階建て豪邸です。貴族になった気分を酒を飲んでいたら、おおばさんが「ここは厳しいんだよなあ」とボヤいたそうです。

家の賃貸契約に「窓べの花を絶やさないと」とありました。そのため近所の花屋さんにも月何万円も払わねばならない。裏に四軒共同の中庭がある。ここも持ち分の土地に花を絶やせず、ほっておくと向かいの家のおおばさんがイスを持ち出してこちらを睨む。

先輩記者は思ったそうです。スイスやオランダあたりで窓に花のある風景を見て、ああ花を愛する心やさしい人たちが住んでいるんだなあと思っていた、それは間違いだった。町を自分たちで守ろうという厳しい地域社会のルールがあるんだなあ、と。柳田国男の言葉思い出させる話です。

みなさんも、そんなような美しい村をつくりあげたいと思っておられることでしょう。そのためにはどうすればいいか。きょうの話がご参考になれば幸いです。

平成元年度 活動報告

た観光開発の最終仕上げによって住民の生活安定をはかる
古くからの真宗門徒を育てながら村おこし事業によって住民人口の増加をはかり併せて純粋な政治活動の展開をめざす

- ① 所属委員会
- ② 本年度取り組んでいる事柄
- ③ 今後取り組みたい課題

中村 幸教
石川県議 4期
石川・島崎山・光徳寺衆徒

- ① 文教公安委員会
- ② 教育関係、農業関係
- ③ ②に同じ

柴田 薫心
北海道 札幌市議 3期
北海道・札幌・宝流寺住職

- ① 総務委員会
- ② 消費税にかかわる条令改制について
- ・ 調整区域、市街地区域見直しに関する問題

嶋田 政憲
福井県 勝山市議 2期
福井・福井・本覚寺住職

- ① 教育民生、道路対策特別委員会
- ② 当市における、幼稚園、保育所行政の改革について
- ・ 社会教育の充実
- ・ 中部縦貫自動車道路の早期着工と地元対策について

山田 真澄
三重県 東員町議 8期
東海・員弁・浄源寺住職

- ① 総務常任、広報委員会
- ② 議会広報の充実
- ・ 文化会館の運営

③ 今年度より全町の下水道事業が開始されるのでその進め方と、財源の確保

安藤 智純
三重県 尾鷲市議 2期
東海・勢南・光円寺住職

- ① 環境特別、議事運営、経済建設委員会
- ② 市政の調和的充実
- ・ 自然環境、生活環境の諸問題

③ 福祉行政の在り方
・ 過疎、高齢化の地方自治体の問題
・ 文化創造の課題

北川 真道
滋賀県 秦荘町長 1期
滋賀・愛知上・浄甫寺住職

- ② ふるさとの活性化事業、若者の定着
- ・ 工業立地促進

中田 宗人
岐阜県 明方村議 3期
岐阜・郡上・円光寺住職

- ① 総務常任、観光開発特別委員会
- ② 過疎からの脱却をはかることを目的とし

花木 肇正
富山県 大島町議 3期
高岡・射水・称念寺住職

- ① 総務委員会
- ② O・A化と土曜閉庁に伴う残業との関係、特に職員定数と人口の問題
- ③ 行政改革と職員定数問題
- ・ 自民党推薦と靖国神社問題

- ・アクセス道路の完備
- ・福祉の充実
- ・生涯教育の推進

△注 西殿、和田両氏は連名にて報告書を提出△

西殿 香連

和歌山県 和歌山市議 8期
和歌山・和歌山・西正寺住職

① 経済企業委員会

和田 秀教

和歌山県 和歌山市議 4期
和歌山・和歌山北・正光寺衆徒

建設消防委員会

② 関西国際空港関連プロジェクト「コスモパーク加太」

経済の活性化、地域振興の活用し得る土地を開発することを目的に、国際化と情報化の時代にふさわしい魅力あふれる新しい街の建設事業。

・「和歌山マリーナシティ」

「関西国際空港開港をインパクトとして、地域の活性化を図る観点から、和歌浦湾の優れた海洋観光資源を活かし、わが国初の人工島方式による国際的都市近郊型レクリエーション施設の建設。

・「第2版和国道計画」

「国道26号バイパスとして、関西国際空港の立地を軸に広域交通に適切に対処するとともに、地域内外の活性化促進、秩序ある地域整備に寄与し、市民生活の向上を図る事業。

③ 前記各事業の推進

永原 智徳

和歌山県 由良町議 1期
和歌山・日高・教専寺住職

① 総務委員会

高齢化社会福祉について（健康センターを設置し、データーベースセンターを開設）

② ③に同じ

藤沢 大紀

兵庫県 香住町議 5期
兵庫・城崎・光永寺住職

① 総務常任委員会

② 公共下水道問題

・定数（議員）問題

③ 漁業と観光の結びつきについて

堀川 晃尚

兵庫県 揖保川町議 6期
兵庫・揖保西・元誓寺住職

① 産業施設常任委員会

② 会場整備事業

・下水道事業

経谷 隆道

兵庫県 南光町議 6期
兵庫・佐用・西蓮寺住職

① 経済、土木委員会

本年度事業として総合スポーツ公園に隣接して墓地公園を併設する。墓地の維持管理は町が行い、現在、山の中腹にあって参拝困難な墓を参拝しやすくするため、新しく墓を作って車で参拝を可能にし、

都会へ出ている人にふるさとを忘れないように仕向ける。

③
・古文書を収集して町史編纂に取りくむ。
・民俗資料館を建設して歴史的遺産、文化財の民示、保存につとめる。

松元 顕正

島根県 仁摩町議 2期
山陰・仁摩・松原寺住職

① 経済委員会

竺川 紹隆

島根県 金城町議 2期
山陰・福屋・浄光寺住職

① 経済委員会

② 63年災害の早期復旧

・町立保育所の民営化問題
・高齢者問題の長期計画樹立

③ 町の総合開発

大前 勝乗

香川県 坂出市議 5期
四州・飯山北・善光寺住職

① 鉄道高架特別委員会

② （プロジェクト事業の推進）

・坂出市中心市街地活性化計画の認定を受けた事業の中でも特に緊急を要する坂出駅周辺地区再生計画と、これを具体化するために坂出駅北口市街地再開発事業を推進するための調査を実施してきた。この調査結果に基づいて地域

住民とのコンセンスを図りながら実現にむけて努力してゆく。

・坂出駅付近連続立体交差事業について事業認可も得られ、本年5月12日にJR四国との工事協定も締結し、本年より用地買収を重点的に実施して、早期完成にむけて努力してゆく。また、高架事業完成までの間、暫定措置として坂出駅構内に跨線橋を設け、改札口を開設するほか、南北交通の緩和を図るための仮踏切も設置する。

⑤ 四国横断自動車道の早期完成
・架橋効果を最大限に生かすための主要幹線道路の整備

・高架事業に伴う周辺整備の早期決定と事業着手

・下水道整備の早期完成
・観光開発の推進

藤谷

光信

山口県 岩国市議 4期
山口・岩国・教蓮寺住職

① 総務常任委員会

② 岩国市には米軍基地と、海上自衛隊の基地があり、目下基地対策特別委員会委員長をしています。岩国基地の滑走路を一〇〇米海側へ移転する運動にとりくんでいる。

③ 教育、福祉問題を中心に市政全般に亘つ

てとりくみたいと思います。

川越 証真

山口県 美祢市議 5期
山口・美祢西・西音寺住職

① 教育福祉委員会

② 小学校改築

・市立病院建設
・ふるさと創生
・地域の活性化
・過疎化への歯止め
・工場誘致
・化石の保存

久富 武士

福岡県 方城町議 5期
北豊・田川中・高源寺住職

① 総務委員会

② 財政再建

③ 議会制民主主義

林川 昭

福岡県 豊前市議 2期
北豊・上毛・明泉寺住職

① 総務委員会

② 教育行政の民主化

・同和行政の正常化
③ 市民本位の教育と福祉に関して

衛藤 龍天

大分県 久住町長 2期
大分・岡・安照寺住職

④ 久住高原のリゾート（総合保養地域）指定へ別府くじゅうリゾートV

・水田基盤整備事業の推進

・久住町立久住小学校の移転改築

・国民宿舎整備

⑤ 久住小学校跡地へ総合文教・厚生施設建設（中央公民館・福祉健康センター）

・第3セクター会社「グリーンステイ久住」設立による観光開発

・若者の住める農業と観光の町づくり

隈部 弘正

熊本県 菊鹿町議 2期
熊本・山鹿・光厳寺住職

① 建設常任委員会

② 庁舎建設他

③ 地域の開発と併せて人づくり。

佐々木 一法

熊本県 五和町議 1期
熊本・天草下・西明寺住職

① 経済、建設常任委員会

② リゾート推進に向けて

③ 町活性化にどのように取りくむか。

尾前 新了

宮崎県 椎葉村議 3期
宮崎・椎葉・弥専坊住職

① 総務常任委員会

② 観光開発長期総合計画（見直し）

・福祉行政（特別養護老人ホームの建設）

- ① 道路網の改良、整備
・ひえつきの郷づくり（リゾート取り組みについて）

黒木 隆之 鹿児島県 志布志町長 5期
鹿児島・東隅・金剛寺衆徒

- ② 南九州志布志湾の大リゾート開発
・国際物流基地の建設。

《世話人改選》

代表世話人に川越氏



このたび、はからずも代表世話人に再びご推挙を頂き、責任の重大さを痛感しております。

本会も結成以来十五年が経過しましたが、五十年代の後半から会員数は減少の一途をたどってきました。その原因としては、法務が多忙になってきたことが挙げられますが、立候補自体も難しくなっていることは否めません。地域での僧侶への期待の幅が狭くなっているのです。こうした現実をどのようにとらえ、どう対応していくか。本会が取り組むべき課題は少なくありません。十五周年を新たな出発の契機として、会の充実発展に邁進する決意です。よろしくご協力のほどお願いいたします。

「平成元・二年度」世話人名簿

第一ブロック（北海道・大阪）

橘 大亮 北海道 南富良野町 町長

北海道・上川南・玄正寺住職

花木 肇正 富山県 大島町 議員

高岡・射水・称念寺住職

西殿 香連 和歌山県 和歌山市 議員

和歌山・和歌山・西正寺住職

第二ブロック（兵庫・山口・四国）

経谷 隆道 兵庫県 南光町 議員

兵庫・佐用・西蓮寺住職

竺川 紹隆 島根県 金城町 議員

山陰・福屋・浄光寺住職

大前 勝乗 香川県 坂出市 議員

四州・飯山北・善光寺住職

藤谷 光信 山口県 岩国市 議員

山口・岩国・教連寺住職

川越 証真 山口県 美祢市 議員

山口・美祢西・西音寺住職

第三ブロック（九州）

久富 武士 福岡県 方城町 議員

北豊・田川中・高源寺住職

衛藤 龍天 大分県 久住町 町長

大分・岡・安照寺住職

尾前 新了 宮崎県 椎葉村 議員

宮崎・椎葉・浄行寺住職

平成元年度

総会報告

一、日時 平成元年五月二十六日（金）

二、場所 庁舎三階大会議室及び和室

三、出席者 十七人（会員十六人・賛助会員一人）

四、開会式 勤行（重誓偈）、藤澤総務挨拶、

真宗宗歌、

五、総会

イ、代表世話人挨拶

山口県・美祢市議 川越 証真

ロ、議長選出 兵庫県・南光町議 経谷 隆道

ハ、昭和六十三年事業報告

ニ、昭和六十三年決算報告

ホ、昭和六十三年度会計監査報告

ヘ、平成元年度事業計画案《承認》

ト、平成元年度予算案 《承認》

チ、世話人改選

六、講演 「ふるさとをどうするか」

朝日新聞大阪本社論説委員

水江 信雄

七、座談会 「僧侶議員の役割と問題点」

座長 富山県・大島町議

花木 肇正